

俳優・歌手

## 井上 芳雄さん

ミュージカルを観劇したことがありますでしょうか。デビュー以来、その人気に火を付け、ミュージカル界を牽引し続けた井上芳雄さんのインタビューをお届けします。井上芳雄さんの歌や演技に対する、こだわりや努力の一端に触れ、ミュージカルの魅力を感じることができました。ミュージカル、舞台演劇に興味をもっただけのきっかけとなれば幸いです。

聞き手・構成：富田 寛之、石原 修、坂 仁根



— 『ムーラン・ルージュ！ザ・ミュージカル』お疲れさまです。

ありがとうございます。ご覧いただいたんですか。

— とても素晴らしかったです。

ああ、うれしいです、そう言っていたいて。昨日、無事全部終わったので、すがすがしく感じています。

— どういうきっかけで音楽を始められたのですか？

両親がクリスチャンで教会に通っていて、だからもう生まれたときから教会には行って賛美歌を聴いていて、幼稚園ぐらいから子供聖歌隊でずっと賛美歌を歌っていました。なので、もう小学生ぐらいには歌を歌うのが好きというか、得意な感じでしたね。

— ミュージカル俳優になることを、早い段階からお考えになったのですか？

そうですね。小学校4年生ぐらいに『キャッツ』というミュージカルを見たときに初めて自分が、ミュージカル俳優というものに、得意な歌を使ってなれるかもしれないと思ったんです。

— 『キャッツ』のどの辺に惹かれましたか？

世界観が『キャッツ』は独特じゃないですか。別世界に連れていってくれるみたいな経験も初めてだったので、そこにすごく惹かれたんでしょうね。あとは『メモリー』という曲があるのですが、思いがけず『メモリー』をすごい熱量で歌われて、初めて感動というのを認識したのがそのときでした。理屈じゃないというか、何か分からないけど泣きそうだなみたいな。本当に初めての体験が『キャッツ』で、そこで感動したので、これは何なんだろうというのがすごく大きかったんだと思います。立場の弱い人とか、今は老いてしまったり、衰えてしまった人が、でも歌を通して、もっとこうしたいんだという強い思いを表現するのがミュージカルの1つの素晴らしいところだと思うので、そのエネルギーに感動したのかなという気はしますね。

— 「台詞、何で音楽に乗せるの？」という質問がありますよね。一般演劇とミュージカルの違いは、どのようにお考えですか？

ドラマを伝えるという意味では、一緒なんですけど、ミュージカルは、歌って踊ってお芝居もする。よりや

ることが多くて大変というのはありますね。でも、その分、伝える力は強いし、何か感動してしまうようなエネルギーはあると思うんですね。逆に、リアルではないところもあって、飛躍というか、ジャンプアップするので、それを音楽を使ってやっているんですけど。でも台詞だけのストレートプレイだと、リアルなところをもっと強みとして深掘りしていきける、人間の醜い部分も描くことができる。それはミュージカルも描けるんだけど、ストレートプレイの方が人間とは何だみたいところは探れるのかなと思います。あとは、ミュージカルだと、特にソロとかは、『メモリー』もそうなんですけど、自分がこう思っているんだという、普段の生活の中で声に出さない声が出るのが強みかなと思いますね。心の声というか、本来ならば誰にも打ち明けることなく人生を終えてしまったかもしれないような思いを、お客さんにだけ教えてくれる。それがリアルではないんだけど、でも本当の気持ちだから、何よりも真実だというのがミュージカルの強みかなと思うんですね。

——ミュージカル俳優を目指す方法として、どういう道を歩まれたんですか？

劇団四季の俳優さんの経歴を見て、東京藝大出身という人が多かったので、ここに行けば何か四季に行く道があるのかなと思って、藝大を目指しました。踊りもやったことはなかったのですが、中学生からジャズダンスのスクールを探して行って、歌も個人の先生に習い始めました。

藝大に入って、2年生の途中でミュージカル『エリザベート』の演出家の小池修一郎さんという方が特別講義みたいなのをしてくださったときにご縁ができて、オーディションを受けました。元々劇団四季を目指していたのですが、そこから思いがけず、『エリザベート』に出演することになりました。

——『エリザベート』で、演技についてはどのように対応されたのですか？

ミュージカル俳優を目指している中で、気持ちだけはたっぷりあって、頑張ればできるかなと思っていたんですけど、演技は、すごく判断が難しいところがありました。歌だと音が合っていなかったらすぐ分かっちゃうんですけど、お芝居って台詞を覚えて言えば、ぱっ

と見、分からないというか。でも、そこがすごく怖いところで、本当に相手に伝わっているかとかいうことはやっている本人も分からないし、一番難しかったです。だから最初は勢いでやらせてもらっていたんですけど、役が大きくなったりするうちに、何かもう自分の手に負えないというか、自分の実力ではこれはできないというのは、痛いほど分かったので、そこからはお芝居をやりながら勉強したという感じでした。

——舞台や役で、特に印象に残っているものはございますか？

きっかけになったという意味では、井上ひさしさんの『組曲虐殺』という戯曲で、小林多喜二さんの役をやらせてもらったことがありました。ミュージカルではなかったんですが、でも歌もあって。小林多喜二って名前は知っていたけど、どんな人かはよく知らなかったし、よく調べてみたら、ものすごい人生を送った人だったんですね。そのときの自分の思想を曲げずに命を落としたとか、拷問されて獄中死していたんです。僕の演技力じゃ、こんな大きな人を演じられないと結構悩んで。でもなんとかして伝えたい。自分がうまい、下手とかいうよりも、彼が生きて伝え、残したかったことを自分たちが今の時代につなげていくことが演劇の1つの使命でもあるので、もう下手でもいいから頑張ろうというふうに思えたのが、その役でした。

——その役を通じて、演技力が鍛えられたんですね。

最初の頃は、演出家に演技のダメ出しをされても、どうしたらいいのか分からない、才能がないのかなと思っていました。だから一個一個ですかね。先輩からのアドバイスとか、経験とか、ボイストレーナーの安ますみ先生に教えてもらったりもしていたんですよ。

——歌の先生に演技を教わったのですか？

安先生に、まったくお芝居が分からないんですよと言ったら、台本に全部書き込んでくれて。安先生の理論だったんですけど、距離感が全部それは違うはずだと。1のエネルギーでいるときもあれば、遠くの人には5のエネルギーを使うときもあるかもしれない。あなたは全部同じ距離感で言っているから、全部分けなさいと、数字を振りなさいと言われて、夜中までやって、次の

日、それでやったらよくなったなと皆さんに言われたんです。

—— 著名な役を演じてこられました、役や歌によって役作り、歌唱法などを変えたり工夫したりすることがありますか？

役作りができるほど演技の経験も、知識もなかったので、その都度、演出家がこうしてみたい、こうしてみようよ、と言われたことに全力で応えるようにしてきましたんですけど、『エリザベート』は最初ルドルフという役で、今はトートという役ですが、全然タイプの違う役なんですよね。ルドルフは、青年が不安の中でもがきたいな役で、デビューしたときの、僕はそういう状況だったから、本人と役が合ったということだと思うんですけど。トートは死神で、この世のものでもない雰囲気があって、カリスマ性もあるし、妖艶でもあるし、何かそういう感じの役は、それまでやったことがなかったので。

だから、試行錯誤もしました。同じ役を3回ぐらいやらせてもらっていますが、その都度、何か変わってしまいますね。変えようと思っているわけでもないんですけど、結果違う。毎回そのときの自分を反映したトートになるんでしょうし、それが面白いのかなと思う。相手役の人とやっている中で生まれるものを膨らませていく方が、うそはないのかなという気はします。

—— 相手役との関係性で変わってしまう、変わっていくことはありますか？

僕も最初分からなかったんです。自分で台詞を覚えて、自分のタイミングで台詞を言うというのが主な仕事だと思っていたんですけど、今、思うのは、自分が台詞を言うよりも、相手の台詞を聞く方が難しいと。自分たちが自然にやっていることなだけで、それを意識的にやろうとすると、ものすごく難しいし、複雑なことをしているんだと思うんですよ。芝居では、何十回も同じ会話を毎日するんですけど、それを新鮮にやるには、すごく技術、相手が何て言っているかを聞くことに全神経を集中していて、その結果、何か自分からも何かしら出るみたいなの積み重ねで1個の舞台ができているんだと、今は思っています。

—— 今後やってみたい舞台とか役はありますか？

やりたい役も好きな作品もあるんですけど、ご縁だから、どんなにやりたいと言ってもやれない役もあるし、ひょんなことでやれちゃう役もあるし、あんまりそこに固執しない方がいいのかなという気はしています。来年やる『二都物語』という舞台も、12年前にやって。大好きな作品だったんですけど、再演の話もなかったのですが、巡り合わせで、来年やることになって\*1。でも、日本のミュージカルというのをすごく愛していて、もっともっと広げていきたいというのがあります。

最近よく韓国に行くんですけど、韓国の方がミュージカルの教育などの点で日本より先をいっているように感じますね。日本は、ミュージカルに関して、教育とか人を育てる統一された仕組みが、確立されていないんですね。劇団四季の人がいれば、宝塚もいて、僕みたいに演技をやったことがない人もいるし、それぞれの演じ方で集まってやっているのが面白さではあるんですけど、効率が悪いというか、足並みがそろいにくいんですよ。

個性はあっていいと思うんですけど、最低レベルのメソッドとか、共通認識みたいなのはあった方がいいんじゃないかなと思っていて。韓国は、欧米のメソッドを持って帰ってきて、それを活かしてやっているの足並みがそろっているんですよ。僕がそういうのを整える役割ではないかもしれないんですけど、もっと日本のミュージカルが発展していくためには、そういう準備も必要んじゃないかなと思います。そういうお手伝いをしたり、新しい作品と一緒に作ったりしたいなど。

—— 最近、ミュージカルで、ポップス的な歌い方をされる方も多かたりするのかなというふうに感じっていますが、何か意識されているところはありますか？

そうですね。変わってきているところもあると思いますね。やっぱりミュージカルで使われる音楽のジャンルも変わってきていて。だからミュージカルはその都度、歌い方もそこに合わせていかなきゃいけないので大変なんですけど、でも基本のメソッドがちゃんとあって、それプラス、ロックを歌うにはどういう技術が必要なのか、ポップスだったらどっちの方向がいい

\*1：このインタビューは2024年9月29日に行われた。

のか、クラシカルなものはどうしたらいいのかというのに対応していけば本当はいいと思うんですけど、なかなかまだそこまで、僕も含めていってないの。

安先生以来、長期間先生に付いたことはなかったんですが、2024年から韓国でレッスンを受けています。韓国でのレッスンは、方法論が違うというか、クラシック出身の先生なんだけど、大きな声を出さなくていいし、マイクに乗る声をつくりましょうと言う。照準を合わせているんですね。日本は、そこがまだ、ばらばらというか、そういう人もいるけど、クラシックみたいに歌う人もいるし、逆に声が小さい人もいるという感じですね。

——『ムーラン・ルージュ! ザ・ミュージカル』は全編歌がポップスですが、井上さんの舞台を観たときに、ミュージカルとして、芯がちゃんとある、出演者の皆さんが、井上さんが出たことによって、全員がひとつ、筋が通っているように感じられて、素晴らしかったなと思いました。

いや、うれしい、すごくありがたいです。僕もそうだったらいいなと思ってやっちはいるんですけど。でも逆に言うと、ミュージカルの歌い方ってこれですというのはないので、自分が思う歌い方を体現するしかないんですけど、作品によって違うから、僕の歌い方がフィットするものもあれば、ちょっとやっぱりクラシックっぽく聞こえたり、もうちょっとポップスでというか、そういう話ももちろんされるし。でも、それぞれが思うミュージカルでの歌い方、歌唱というのを、みんな追求しているんじゃないかなと思いますけどね。答えがない問いではあるんですけど。

—— 弁護士についてどのような印象を持っておられますか？

僕は、『行列のできる相談所』に出演していますが、弁護士さん達が、1つのテーマについて討論されている回があります。同じテーマでも解釈というか、弁護士によってこんなに違うんだという点がとても印象的でした。

皆さん法律を勉強されていて、事例も分かっていて、足並みがそろおうのかなと思ったら、真反対の答えが出てきたりするんですね。すごく驚きました。

あと、ドラマでヤメ検の弁護士をやったことがあって、役作りで裁判を見に行ったんですよ。それがやっぱりすごく印象的でした。その裁判はめっちゃくちゃ淡々

としていて、何かこの人が人を殺したようにも見えないし、異議ありとかも言わないし、声を誰も荒らげないし、淡々と進んでいって、認めますみたいな感じで終わって行って、逆に生々しいなと思って。

自分とは別世界なところで、ドラマチックな裁判って行われているのかなと思っていたんですけど、実際はとても日常の延長線上にあって、犯罪も日常の中で起こるわけだろうし、それを弁護する人も裁く人も淡々としていて、お仕事の一環としているんだというのは何かびっくりしました。お芝居にも、参考になるような。どうしても、異議あり! という感じのドラマチックなお芝居をしちゃう気もするんですけど、そればかりじゃないというか、そうじゃない方が多いんだろうなという気がしましたね。

—— 弁護士にこうあってほしいとか、期待していることはありますか？

僕は幸い、まだそこまでお世話になったことはないんですけど。でもいつどうなるか分からないですし、やっぱり僕たちの味方というか、市民の味方であってほしいなというのは思いますね。依頼者を徹底して弁護するということ自体が、市民を守っていることにつながるんでしょうし、やっぱりそこは死守していただきたいなと思いますね。

だから、ちょっとミュージカルと似ているけど、敷居の高さも何かあるような気はしますね。ちょっとドアをたたきにくいというか。

—— 確かに。弁護士事務所に行くって、ハードルが高いですよ。

何かちょっと困ったときに相談できるという存在でいていただければ、すごくありがたいなと思います。僕たちがやっているミュージカルも、そんな風に気軽に見に来てもらえるような場でありたいです。

#### プロフィール いのうえ・よしお

1979年福岡県生まれ。東京藝術大学音楽学部音楽科卒。大学在学中に「エリザベト」皇太子ドルフ役でデビュー。以降、高い歌唱力を生かし舞台を中心に活躍、数々の演劇賞を受賞。近作に、『ラグタイム』『ジェーン・エア』『メディア/イアソン』『ムーラン・ルージュ! ザ・ミュージカル』など。また、音楽・バラエティ番組でも活躍。レギュラー番組、TBSラジオ「井上芳雄 by MYSELF」、BS-TBS「美しい日本に出会う旅」、NHK総合「はやウタ」、日本テレビ系「行列のできる相談所」、WOWOW「芳雄のミュー」が放送中。